

- 啓 明 會 日本交通労働組合
- 新聞工組合正進會 工 友 會
- 日本印刷工組合信友會 東京鐵工組合友愛會
- 大 進 會 友 愛 會
- 日本鐵夫總同盟

東京毎日新聞は労働組合同盟會より右の如き背信彈劾の宣言を受けたるも、同盟會の彈劾の如何に拘はらず東京毎日は労働者の新聞なりとて十五日夕刊に左の如き記事を掲載したり。

十月十六日東京毎日新聞二面掲載記事

突如労働界の沈黙を破つて勞資爭議の火の手は新聞界に、報知先づ端を發して萬朝に移り、讀賣、東京日日難戦して奔湍更に東京朝日、やまと及本社に及ぶ、今尙對抗擊争中形勢まだく險惡（以上標題）

財界不況の一雨で、さしも燃え盛つて居た勞資の爭議が萎縮鎮靜に歸したと思ひきや、昨今に至り突如我新聞界の内部に再びその火の手を逞うするに至り、今尙勞資の間に横はる爭議が全然屏息して居るのではないと云ふ事を暗示するに至つた。

其の發端

去る九月廿六日の事である報知新聞社の製版工場員は社に向つて、二部制の即時断行及び最低賃銀八十圓制、其他四ヶ條の要件を提出せんとしたるも職工間に異論ありて議難らず、二派に分れて紛争したる結果、硬派は遂に工場内に於ける活字の棚を顛覆して同新聞の發行を不能ならしめんと企てた。しかし同社では豫て出張警戒中なりし日比谷署の刑事の爲めに五名は暴行現場を取押へられ引致せらるゝ事になつたので其の途中に於て『要求書』を工場事務所に提出するの前後矛盾の状態に陥るの止むなきに

立到つた。一方報知社では此暴行に依りて地方版の發行を不能ならしめられたるに激怒し、直に二十八名の硬派と認むべき職工を解雇し、工場の改造を断行したるを以て、茲に昨年の總罷工以來鎮靜に歸し居りたる新聞界の勞資戰は再び慘澹たる白兵戰を演出する事に立ち到つたのである。

争端開始

茲に於て新聞工組合正進會は、報知社の會員が除外例を要求して起したる此爭議に對し、奈何なる態度を採るべきかに就て協議の末、二部制度は昨年之の爭議の際新聞社側がこれを認むべきことを聲明したる關係上一年後の今日之が即時断行を求むは當然の事なりとし、最低賃銀八十圓も敢て不當に非ず大いに要求すべし、と爲し、陣容を整へて各新聞社の工場に氣勢を添ふべく活動を始めたので、讀賣、萬朝報、時事、朝日の各社工場にてもそれぞれ要求條件を提出するに到りたりそこで新聞社側には廿九日京橋區八官町和合亭に會合して打合せを行ひ、二部制はこれを認め、各社適宜に施行する事としたが、最低賃銀八十圓は物價下落の傾向を有する今日、就中市内印刷諸工場の職工より約一割方の増収ある新聞工に對し更に値上せざる可らざる必要を認めず、大勢に逆行する要求なりとして之を拒絶することに決したので、茲に兩者の主張も全く鮮明となり陣容は更に新なるに至つた。即ち、卅日夜先づ讀賣新聞社に於ける衝突となり、十日遂に同社の製版部職工六十数名の總解雇となり、同社は慘澹たる苦心を累れて新聞紙の發行を繼續したるも、其地方版は遂に製版不能に陥つた。萬朝報社は二日新聞紙の發行不能を感かりて職工側の要求を容るゝ事となりたれば、工場員側は大いに氣勢を擧げ、續いて九日には正進會の會員一名もなかりし東京日々新聞の工場にも同目的の爲めに罷工起り、之また地方版の發行不能となつたので、新聞社側は和合亭に連日協議會を開いて善後策に腐心した。

各社難戰

工場員側にあつても各所に集合して對策を講じ、十三日にはやまと新聞、東京朝日新聞、の工場に大動搖があつたが孰れも新聞紙の發行を不能ならしむるに至らず、同日本社の工場内にも一名の不穩なる言動を試みたる者もあつたが之れ亦大事に至らなかつた、此間には正進會、友愛會、信友會、坑夫同盟、其他の労働團體の幹部諸君が之を耳にして忠言を加ふる處ありたる杯の挿話があつたのである、十四日には東京日々新聞及び讀賣新聞の工場は平常の状態に復活したが、一般に未だ險惡の雰囲気を感じたと云ふ域には達しない、新聞界の勞資爭議は今尙對抗中の形勢にあり、暗雲徂徠して物情頗る陰鬱不安の趣がある。